

取材の主対象を失った岡村は、この空白の五年のうち、一九六八年から七〇年初頭にかけて、三度にわたりアフリカ大陸に赴きビアフラ独立戦争を取材した。この時代のことを、彼は「世界史のシッポをとらえつつあったとき」としている。その後、入国禁止処分が解けて、一九七一年二月に起った「ラオス侵攻作戦」を取材し、『ライフ』一九七二年三月二日号、三月二十六日号、四月二日号に掲載された報告は、「国際報道写真家としての内面の成長の結果を、最もよくあらわした作品だった」と述懐している(岡村一九七九c)、『5』二〇頁)。このときには、「世界史のシッポをとらえた後」であると言う。ということは、彼が「世界史のシッポ」を捉えたと自覚したのは一九七〇年前後ということになる。その足どりを『岡村昭彦集』第六巻巻末の年譜で追ってみることにしよう。

「一九六八年」一月一日、初めてダブリンに行き、二〇日間ほどをアイルランドで過ごす。アイルランド系アメリカ人とヴェトナム戦争の結びつきを探る。国民文化会議(五月から常任委員に推される)ほかの要請により、北海道美唄・夕張などの炭鉱を調査(四月)。五月、母・順子、静岡県舞阪町で死去、以後舞阪の家を日本での拠点とする。カリフォルニア州のアメリカ大統領予備選挙をユージン・マッカーシーの側から取材中に起きたロバート・ケネディ暗殺事件を現場から日本に報道(六月六日)。ジュネーブでの非核保有国会議を写真で記録しようとして失敗。その後、ロンドンから、初めての西アフリカ、ナイジェリアのラゴスに行く(八月)。ナイジェリア側から内戦を取材し、スペイン領フェルナンド・ポー(赤道ギニア)に行き、ビアフラ入国を図るが果たさず(九月)。北アイルランドのロンドン・デリーで公民権要求デモ闘争を取材、アイリッシュタイルムスと契約(十一月)。西アフリカ洋上のポルトガル領サントメ島で、ビアフラ入国のため待機

(一二月)。

「一九六九年」前年のクリスマス直前から乾季のビアフラに入り、その独立戦争に従軍(二月)。その後日本に戻り、ダブリンに行き、貨物船で南下して再びビアフラに入り、六月初めから七月の終わりまで、雨季のビアフラ戦争を取材。ロンドン・デリーでのプロテスタント祝賀大行進によるカトリック教徒との衝突、IRAのレジスタンスによって燃えるベルファストなどを取材(八月)。一〇月、奄美大島を取材。十一月、ジブラルタル、モロッコなどを訪れる。

「一九七〇年」カメルーンからラゴスへ寄り、エチオピアのアジスアベバ取材(一月から二月)。ビアフラ崩壊後のナイジェリア取材(三月から五月初め)。カンボジア、タイ、マレーシア、インドネシア、ニュージブランド、オーストラリア、アイルランド、インドなどをまわる(五月中旬から九月初め)。九月、入国禁止が解けて五年ぶりのサイゴンで、嶋元啓三郎と会う。六カ月のビザ延長に成功する(一〇月)。サイゴン市内にアパートを一部屋借りる(十一月)。暮れにブノンペンに行く(一二月)。

実に多岐に渡る取材活動を、まさに世界を股にかけて行なっていることがよくわかる。ヴェトナムへの入国拒否という制約条件を逆手にとって自由に羽ばたいているという印象さえ受ける。

### 三 ヴェトナムからアイルランドへ

まず注目すべきは、一九六八年一月一日にはじめてアイルランドを訪れた点である。岡村は、ケネディ(John Fitzgerald Kennedy, 1917-63, アメリカ合衆国大統領)に在任一九六一―六三時代のヴェトナム戦争

を「核時代における特殊戦争」と位置づけていた。巨大な核戦略構想の下での特殊部隊をつかった「特殊戦争」という二重の把握である。この特殊戦争においては、ヴェトナム山岳部族を懐柔、馴致して対ゲリラ用に組織するという手法がとられた。ヴェトナムにおける被差別者である山岳部族をヴェトナム人の敵に仕立て上げるそのやり方に岡村は激しく憤った(むの・岡村、一九六八、一五四―一五五頁)。

「世界史のシッポ」に做つて言えば、岡村がヴェトナム報道に携わる前に発見した「日本史のシッポ」は、被差別部落だった。劇作家の久保栄(一九〇〇―五八)によって、個々の事件に分断されない骨太の歴史観を学んだ若き日の岡村は、その後被差別部落を発見し、また被差別部落のなかで実際に生活することを通して、独自の日本史観を形成するに至っている。彼にとって、日本近代史の基底を貫いているのは被差別部落への「差別」であり、その派生系として朝鮮人差別を位置づけている。岡村は、ヴェトナムの戦場を取材する際にも、被差別部落での生活の体験を忘れることはなかったし、そこで培われた「反差別」の意識は生涯岡村をバックボーンとして支えていたと言つてよいだろう(高草木、二〇一〇、参照)。

岡村を当惑させたのは、ヴェトナムにおいて「差別」を逆手に悪辣な仕掛けを案出したケネディが、アイルランド系移民の子孫、つまりアメリカ内における差別される少数者であったということである。被差別者が差別するというパラドックスを解くために、岡村はアイルランドに向かう。

一九六八年一月一日ダブリンに到着した岡村は、ケネディ大統領の曾祖父の生家を訪ね、アイルランド移民の実態を調査していく。ニューヨークの大司教フランシス・スベルマン(Francis Joseph Spellman, 1889-1967)のような熱狂的ヴェトナム戦争支持者がアイルランド系アメリカ人から現れる背景を追っていく。

ボストンを中心とする一帯において、プロテスタント勢力は極端な「選民」思想に基づく排他的な傾向をもっていた。その地でマイノリティとして差別されるアイルランド系カトリックは、狂信的で愛国的な反共主義に自ら走ることに由つて辛うじて彼らに対抗する道を見いだそうとしたのである。政治的共同体の「周辺」に生き、外側に排除される不安を抱く者は、政治的共同体から存在の「承認」を得るために戦闘の最前線を自ら志願する。だから、ゴ・ディン・ディエム(Ngo Dinh Diem, 1901-63)ベトナム共和国大統領、在任一九五五―六三をアイルランド系カトリックが担いだことは偶然ではない、と岡村は考える(岡村(一九六八)、『3』一六頁)。

アイルランドには、宗教対立、民族対立、植民地支配、貧困等々、およそあらゆる世界史の矛盾が集約されていた。しかも、そうした矛盾の鬱積の起点となっているのは、近代ヨーロッパの基礎を築いたピューリタン革命であり、また名誉革命だった。ピューリタン革命を共和政樹立にまで導くと、クロムウェル(Oliver Cromwell, 1599-1658) イングランド護国卿、在位一六五三―五八)はすぐさまアイルランド支配に乗り出し、抵抗したアイルランド人は、「白人奴隷として馬といっしょに船底に押しこめられ、西インド諸島のイギリス植民地へ送られ、砂糖やタバコの生産にあたらされた」(岡村(一九六九b)、『3』三八頁)。名誉革命後、ウィリアム三世(William III, 1650-1702) イングランド王・スコットランド王・アイルランド王、在位一六八九―一七〇二)は、アイルランドを手中に収めると、「少数派のカトリック教徒たちを、日本の部落差別とまったく同じ発想で、人間以下の人間として扱い、プロテスタント

たちに優越感を味わわせる政策をとった〔岡村(一九六九b)、『3』四一頁〕。岡村はこうした史実を次々に掘り起こしていく。

その後岡村はダブリン郊外に居を構え、そこで四人の子どもが生まれている。アイルランドは、岡村にとって、海外での活動の拠点であり、第二の祖国でもあった。この地で岡村は日本の教育や常識では決して捉えることのできない「世界史」の広がりや深さを自分の肌で感じることができた。

だから、岡村にとつての「世界史のシッポ」はアイルランドであると言ふこともできるだろう。アイルランドの発見によつて、たとえば、日本と朝鮮の関係も、世界史のなかでもう一度位置づけ直されることになる。岡村は、朝鮮総督府学務課が一九二〇年に発行した『愛蘭教育状況』を一つの証拠として提示しながら、大日本帝国の朝鮮支配は、大英帝国のアイルランド支配に忠実に学んだものであると指摘する〔岡村(一九七二b)、『3』七〇頁〕。また、宗教改革以来のカトリック対プロテスタントの根深い対立という視点は、スウェーデンのヴェトナム和平政策に独自の解釈を与えている。ヴェトナム戦争当時、アメリカ脱走兵を受け入れる数少ない国の一つがスウェーデンであり、ベ平連(ベトナムに平和を！市民連合)が逃走援助したアメリカ脱走兵も、スウェーデンに亡命させる作戦がとられた。スウェーデンのこの特異な位置は、人道的な中立国として賞賛の文脈で捉えられがちであるが、岡村はこれを「ルッター派のプロテスタントの牙城であるスウェーデンのローマン・カトリックに対する明らかな挑戦であると私は理解してきた」〔岡村(一九七三b)、『3』三四三頁〕と言ふ。岡村の解釈が正しいかどうかはともかく、こうした視点が少なくとも日本の論壇において欠落していたことは確かだろう。

その後、岡村はアイルランドにおいてホスピスの源流を発見し、それをヴェトナム後の第二の大きな仕事として位置づけていた。世界史の矛盾の垣端（かき）のなから、次代の光となるホスピスを見いだしたのだから、ここに大きな世界史把握の手がかりを得たことは間違いない。先述したように、精神病棟改善の仕事もまた、イギリスの植民地主義との対抗が鋭く意識されていた。

このように、アイルランドにおいて「はじめて南ヴェトナムでなぜ戦争が起つたかを、生きた世界史として知ることができた」〔岡村(一九六九a)、『3』一七頁〕という自覚があるからこそ、それまでのヴェトナム戦争報道に対する痛烈な自己批判が展開される。

「一九六三年夏からPANA通信社の契約特派員として南ヴェトナム戦争に従軍し、世界に送りどどけた私の戦場からの証言が、いかに世界史に足を踏んまえていない、こま切れの戦争報告でしかなかったか」。〔岡村(一九六九c)、『3』一三四頁〕

### 「ヨーロッパ」と「アフリカ」

しかし、「世界史のシッポ」はアイルランドのもう一つ先にあつたようである。岡村がアイルランドで新たに得たものは言わば諸矛盾を抱えた生身の「ヨーロッパ」だった。アジアとアメリカにだけ目を向けては決して見えてこないヴェトナム戦争の淵源を、岡村はアイルランドを通して「ヨーロッパ」のなかに見いだしていった。その「ヨーロッパ」を相対化し、光と陰のコントラストを浮かび上がらせるもの、それが「アフリカ」に他ならない。ビアフラ独立戦争を取材に行くときに、岡村はヨーロッパ人のジャーナリストからこう忠告を受けたことを覚えている。「アフリカの戦争と取り